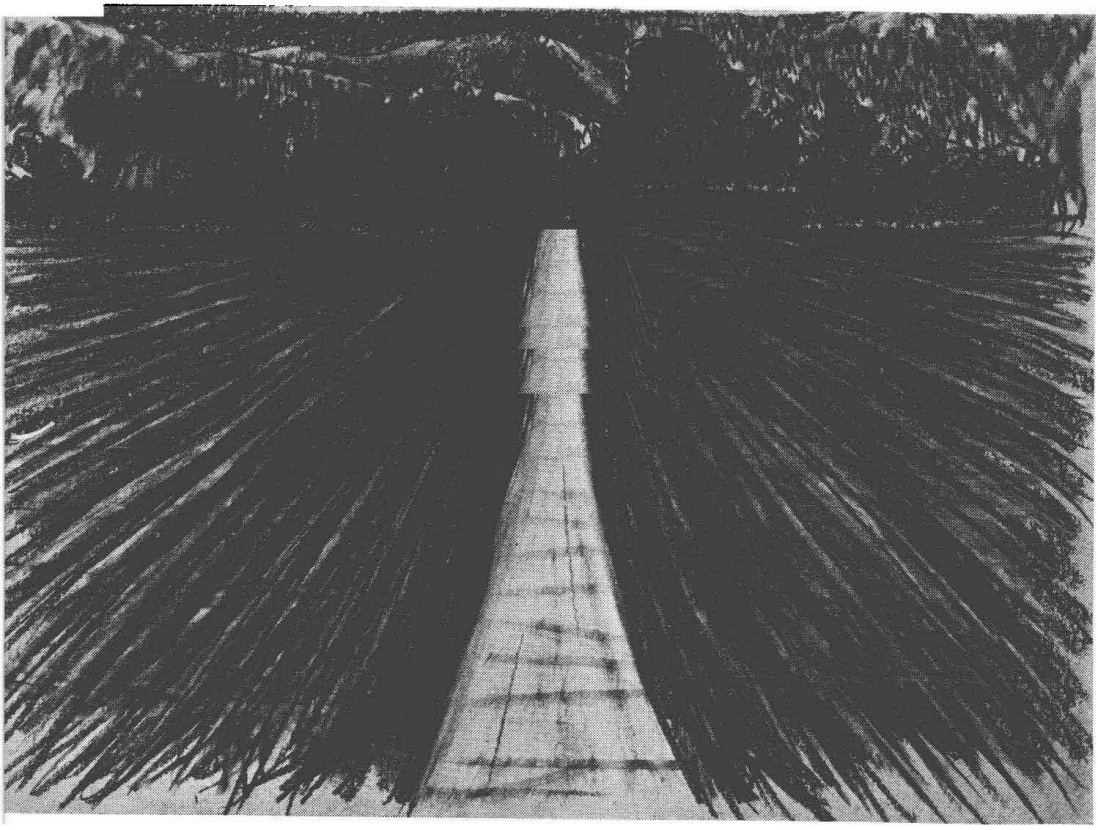
日向 康

果てなき旅（上）

日向 康 著
本田克己 画

果てなき旅（上）

音館日曜日文庫



福音館書店

紹介

康（ひなた・やすし）　一九二五年、栃木県市に生まれる。一九四五年、陸軍士官学校復。「思想の科学」会員。著書に「それぞれの機会」（中央公論社）がある。田中正造についての著作には、ルポ「谷中村」（「思想の科学」通刊第十二号所収）、「谷中村の結末」（「田中正造翁余録」下巻所収・三一書房）、「足尾鉱毒事件と田中正造」（「思想史を歩く」下巻所収・朝日新聞社）などがあり、「田中正造全集」（岩波書店）の編纂に参加している。

本田克己（ほんだ・かつみ）　一九二四年、広島市に生まれる。武蔵野美術大学洋画科卒業。国画会会員。これまで数々の美術展に招待出品しており、毎年個展を開いている。絵本に「やせたぶた」（福音館書店）、「こびとののこぎり」（童心社）、さし絵に「キツネいそっぷ」（理論社）、「日本共和国初代大統領への手紙―空想書簡詩画集」（創樹社）、"Hansel and Grethel"（"Snow White" 所収 TEC）などの仕事がある。

福音館日曜日文庫

果てなき旅（上）

一九七八年五月三十一日初版発行

著者　日向　康

発行　福音館書店

東京都千代田区三崎町一丁目一番九号　郵便番号一〇一

電話（〇三）二九二―三四〇一（代）

振替口座東京五―一一七六四五

本文印刷　明和印刷

表紙印刷　共同印刷

製本　積信堂

NDC289／五一二ページ／一九センチ

乱丁落丁はお取替えいたします。

©1978 Yasushi Hinata

目次

第一章　小中村（こなか）……3
第二章　天狗騒（てんぐさわ）ぎ……69
第三章　六角家との戦い……115
第四章　身もと不明の男……301
途中（とちゅう）で……481

装丁　栃折久美子

果てなき旅（上）

小中村　阿弥陀堂

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章

小中村（こなか）

一

兼三郎が藁草履を大きく踏みつけるようにして、黒っぽい道の上の小石を蹴飛ばすと、道ばたの草むらから、蛙が驚いて、一匹、二匹、三匹と、小川に音を立てて逃げ込んでいった。

まもなく四月（旧暦）になろうとする下野国の田圃は、植えたばかりの小さな苗が、夕暮のそよ風にかぼそく揺れている。

兼三郎をとりかこむ青い田圃は、途方もなく広かった。東から南の方向へ、その広い平野は江戸まで続いていた。北から西にかけては、重なりあった山が見えた。遠い足尾の山々から、この関東の大平野へ、次第に溶け込んでくる山だった。

その山の西の手に、夕焼けが赤々と空を染めあげていた。白、紫、金とさまざまの色の雲が、透き通る赤い空の前で、波打つように躍っていた。

「兼三郎様、小中村の名主様」
誰かが自分を呼んでいる声に、振り返った。
「ああ、赤尾の豊三様でしたか」
目の前に、まだ十四歳の赤尾豊三が立っていた。盲縞の短い袷の裾から、膝小僧をまるだしにして立っていた。履いている冷や飯草履は、とっくに棄ててもいいほど擦り切れていた。
「どこにゆくのですか？　豊三様は――」
赤尾豊三は、兼三郎が子供のころ通った塾の赤尾小四郎先生の孫だった。自分より十歳も年下の豊三に対して、兼三郎はいつも丁寧な言葉を遣うことにしていた。
豊三は兼三郎の問いに、直接答えないで、
「父に会いませんでしたか？　兼三郎様」
と、反対に尋ねてきた。
「いいえ、お会いしませんでしたが――、お父上様がお帰りになられたのですか？」
「はい、赤見村の方で見かけたと教える方があったものですから、急いで探しにまいりました」
そう答えるなり、豊三はすぐ立ち去る様子を見せたが、
「兼三郎様、夕陽がとても綺麗ですね。こうやって見ていると、関東の野はここから始まると言われたお言葉は、本当ですね」

と、言ったかと思うと、稲岡村の方へ小走りに走っていった。
真っ赤に燃えて沈んでゆく太陽を背に受けて、市の沢に抜ける山々が、早くも黒く翳り始めている。下野国小中村は関東の首だ、関東はこの小中から始まると、自分が口癖のように言う文句を、豊三が覚えていたのが、兼三郎にはひどく愉快だった。
（それに、今夜の豊三様は嬉しそうだったな）
豊三の父の赤尾清三郎は、小四郎先生の長男だった。いまから八年前、小四郎先生は八十二歳という高齢で亡くなっている。豊三が、まだ六歳の年であった。
それからまもなく、父親の清三郎が豊三と妹と母を小中村に置いたまま、旅に出るようになった。赤尾清三郎は、志士の仲間入りをしたのだった。

わが国が、ついに鎖国政策を棄てなければならない羽目に追い込まれたのは、十年前のことである。
開国をめぐる数々の不安、黒船の恐ろしさ、紅毛碧眼の外国人の異様な生活ぶりなどの噂話は、そのつど、この下野の村々にも届いていた。そのうち、噂にとどまらなくなった。開国が村々を大きく変えていったのだ。その変わりゆくさまが、兼三郎の耳にも飛び込んできた。
まず、赤尾小四郎先生の塾の先輩たちが、ひどく騒ぎだした。彼らは異人を徹底的に憎んだ。

「油断をしていると、必ずわが国が異人どもに占領されてしまうぞ」
と、彼らは悲痛な表情で若者たちに説いた。
正直に言って、兼三郎は先輩たちの言葉通りには信じられなかった。いや、信じられないというよりも、占領されるという事態を、具体的な事実として理解できなかったのだ。
そんな兼三郎に対して彼らは、
「なにをぼんやりした顔をして見ている、兼三郎。二十年前にはエゲレス（英国）が隣りの清国から香港を奪い取っているのだぞ」
と、躍起になって阿片戦争の話を聞かせたものだ。そう言われてみると、もちろん兼三郎も不安に駆られた。不安に駆られたから、順序として、エゲレスやメリケン（米国）がどんな国であるかを先輩たちに問い質そうとした。だが、先輩たちの西洋についての知識はあまりにも乏しかった。当然、兼三郎の欲求を満足させるまでにはいたらなかった。
（異人とか毛唐とかが襲来すると言って先輩たちは騒いでいるが、その話を聞いてみると、まるで鬼が島の話のようだな。どうも、鬼が島に黒船や大砲というのも不思議な話だな――）
これが、兼三郎の正直な感想だった。が、エゲレスの清国侵略は本当の話だろうと兼三郎も思った。そう思いながらも、先輩たちの話は肝腎の点がよく判らなかった。
兼三郎は子供のときから、よく判らないことに対しては、あまりくよくよ考えない性質だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

結局、異人にわが国が占領されるかも知れないという兼三郎の不安感は、育たずに終わってしまったのだった。しかし、兼三郎が開国について、まったく関心がなかったといえば嘘になった。開国の結果、急激に変わりゆく村の姿に対しては、異常なまでに興味を抱いていた。

外国とのつき合いがはじまって、貿易が開かれると、最初に生糸がどんどん西洋諸国に流れていった。たちまちのうちに、生糸が品不足をきたした。当然、値段も上がった。

小中村の西隣りの足利郡一帯は絹織物の産地として有名だったが、原材料の生糸が手にはいらなくなったために、仕事ができなくなってしまった。もちろん、あわてて蚕を飼い出す百姓も増えてきたが、こんどは蚕種が異常な高値を呼ぶ始末だった。そのあとに、茶やその他の日用の品品までの値上がりが続いた。本来ならば、生糸が売れれば蚕を飼う者の間だけでも景気がよくなるはずであったが、繭の売値にくらべて、生活費の高騰の方がはるかに激しかった。商人たちが、巧みに繭を買い叩いたからだった。

一方、同じ下野国のなかでも、芳賀郡の真岡近辺は綿織物業の盛んな地方だったが、こちらも手酷い打撃を受けた。安価な外国綿糸が流れてきたためだった。開国以前は年に三十八万反を生産する勢いだったにもかかわらず、この十年の間に、わずか五、六万反にまで落ち込むさびれようだった。

足利の絹織物を業とする人びとや、真岡の綿織物で生計を立てる人びとが、家業を失い、働き

場所から棄てられて路頭に迷う憐れな様子は、すぐ小中村にも伝わってきた。

つい最近まで、百姓たちは自給自足の暮らしだった。着物でさえ、綿を紡ぎ布を織り、縫って仕立てあげるまでが家々の女たちの仕事だった。燈火用の油は、自分の家で作る菜種との交換だった。食糧も燃料用の薪も買う必要がなかった。買い求める品物といえば、紙や家具などの日用品、それに炭ぐらいだった。したがって、金銭とあまり関係のない毎日の生活であった。

（ところが、年々、金銭が入り用な暮らしに変わっていった）

こう兼三郎が痛感したように、たしかに外国製品の綿糸の値は安かったが、いくら安値であっても、百姓たちの懐を軽くすることには変わりがなかった。買う品々が数を増せば、それだけ現金の支出が加わるのだった。

（すべて、暮らし向きが苦しくなったのは開国のせいだ。このように頭から決め込むと、天下に異人を憎む声が起こるのも当然だな）

こんなふうに兼三郎が思いながらも、異人に対する憎しみが湧いてこなかったのは、真岡や足利地方にくらべると、開国によって小中村が受けた打撃が軽かったからだ。もちろん、物の値段が上がったことは、日増しに暮らしを脅かしていたが、小中村には綿や絹の織物を業とする人びとがいなかった。目前に、生業を奪われて苦しむ姿が見当たらないためだった。

異人に対する憎悪を剝き出しにした者は、とくに武士に多かった。機会をとらえて、彼らは異

人を襲撃した。そんな武士たちに、人びとは攘夷の志士という名をつけた。

多くの攘夷の志士たちは、異人ばかりでなく、幕府に対しても攻撃の矢を放った。いや、たとえ開国騒動がなかったとしても、早晩、幕府は武士たちからも攻撃される運命にあったのだ。なぜならば、幕府は二百七十年も前そのままの姿で、世のなかの仕組みを凍結していたからだ。物の値段が上がっても、武士たちの禄高は変わらなかった。その上、彼らの多くの二、三男たちは、特別の手腕か功績を買われるとか、入婿の口でもない限り、路頭に迷う危険を生まれたときから背負っていたからだ。

（頭からの異人嫌いと、幕府に対する不満とが、うまくからみ合って噴き出した感じだな）

赤尾小四郎先生の塾の先輩たちの話を聞きながら、心のなかで、兼三郎はこんなふうに考えていた。

たしかに開国は、堂々と幕府を攻撃できる理由を志士たちにあたえた。朝廷の許可が下りる前に、勝手に開国した幕府の責任という点ならば、いくら声を大きくして非難しても、それは、どこからも文句をつけられない筋の通ったものだった。

あるいは、朝廷の存在を無視したからこそ、こんな混乱を招いたのだと、あらためて朝廷を尊崇すべきことを説く志士も現われた。それが、わが国には神の子である天皇がおられる、天子の国を紅毛碧眼の異人に汚されてなるものか、という議論にまで発展していったのだ。

攘夷の志士は、同時に尊王の志士である場合が多かった。そして、いつのまにか尊王攘夷の志士と続けて呼ぶのがあたりまえになった。志士たちは、各地の同志とたがいに連絡を取り合いながら、尊王攘夷の運動に生命を懸けていった。

赤尾豊三の父の清三郎が家に帰ってこられなかったのは、こんな事情があったからだった。

しかし、父親はその志を実現する運動に情熱を燃やしていたかも知れないが、残された家族の暮らしは悲惨だった。母親のタカは針仕事に追われて、夜も昼もなかった。まだ年端もゆかぬうちから、豊三は、駄賃稼ぎの走り使いに精を出して、せっせと暮らしを助けなければならなかった。

幼いころからの苦労のせいか、豊三には妙に意地っぱりの面があった。が、五歳年下の妹のカネにたいしては、ひどく優しかった。兼三郎は、そんな豊三が好きだった。同時に、清三郎先生は今日ただいまの生活のことをどう考えておられるのかと、いつも疑問に思っていたのだ。

しのび寄ってくる夕闇とともに、靄が立ち込めてきた。やがて、痩せこけた豊三の後ろ姿も、その闇にかくれてすっかり見えなくなってしまった。

兼三郎が旗川橋のたもとまできたときだった。暗いかなたから声高に話す人の声が聞こえてくる。言葉の調子が武士だった。

兼三郎は、すぐに豊三を思い出して、人影の方に目を凝らした。やはり、そうだった。

「若先生、若先生、小中の兼三郎でございます」
と、思わず口を衝いて、大声が出た。
「若先生、豊三様が探しておられました」
「やあ、兼三郎だな、久しぶりであったな」
という返事は、赤尾清三郎の声ではなかった。兼三郎が小四郎先生の塾に通っているころ、師範代格の安達孝太郎の声だった。いまは石塚村の先生と呼ばれている、やはり志士のひとりだった。
近づいてきた人影のなかには、赤尾清三郎もはいっていた。清三郎は黙ったまま、兼三郎の方に静かに笑い顔を見せていた。
清三郎は、自分に不言斉という号をつけていた。その号の通り、めったに口を開くことがなかったのだ。
「若先生――」
と、また言いかけて、兼三郎はあわてて口ごもった。小四郎先生の塾に通っていたころの癖が、つい出てしまったからだ。四十歳を過ぎている清三郎に、若先生というのもおかしいと気づいて、あらためて言い直すことにした。
「清三郎先生、豊三様が先生を探しておられました」
「なに、豊三が――」

「はい、まだその辺におられるはずでございます。お呼びしてまいりましょう」
「いや、いや、おかまいくださるな、どうせ家には立ち寄るつもりだった。豊三の奴、なにも拙者を探さずともよかったのに――」
不言斉の清三郎は、嗄れた声で、低く答えた。旅暮らしのその顔色は、まるで渋紙のように陽焼けしている。
「安達先生、お久しぶりでございました」
兼三郎は、安達孝太郎にも丁寧な挨拶を送った。
顔をあげてみると、その隣りにもうひとり、連れの武士が立っていた。兼三郎には初めての顔だった。
その武士も、清三郎に負けないくらい、顔色が黒かった。しかも、その黒い顔が毛むくじゃらだった。揉上げから顎にかけて、伸びきった鬚が、春の夜風にフワフワとそよいでいた。
埃にまみれた黒っぽい袴を、引きずるように長くはいていた。薄暗がりのなかにも、革の足袋がすっかり汚れきっているのが見えた。躰全体から受ける感じが黒かった。兼三郎には、黒い武士という印象が強かった。
よほどの長旅をしてきたのであろうか。
「この者は、小中村の名主の田中兼三郎と申します。拙者とともに、赤尾小四郎先生の塾で学ん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com